

# 韓日の大学の日本語教育における フリップラーニングについての一考察

金 英 児\*

(e-mail : larecancile@hanmail.net)

## <目 次>

- |                                 |                             |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. はじめに                         | 3.2. フリップラーニングの問題点          |
| 2. 研究対象と方法                      | 4. 韓日の日本語教育におけるフリップラーニングの比較 |
| 2.1. 研究対象                       | 4.1. 韓国の大学での日本語教育の場合        |
| 2.2. 研究方法                       | 4.2. 日本の大学での日本語教育の場合        |
| 3. 韓日の大学教育におけるフリップラーニングの先行研究の検討 | 5. まとめ                      |
| 3.1. 韓日の大学教育におけるフリップラーニング       |                             |

キーワード： フリップラーニング(Flipped learning), 大学教育(University Education), 日本語教育(Japanese education), 事例研究(Case Study), 比較研究(Comparative Study )

## 1. はじめに

近年、国内外の教育現場で脚光を浴びつつある授業展開方法にフリップラーニング(Flipped learning)がある。ブランド型授業やアクティブラーニング型授業の一つとして、事前にオンライン学習および動画資料で予習した学習者が、教室で演習やディスカッションなどに取り組むための教育方法である。

韓国でも大学教育に携わっている人ならば大学側からの勧めあるいは教員自らが必要性を感じ、一度はフリップラーニングを取り入れた授業に関心も持ち、工夫してみたことがあると思う。しかし、実際授業のデザイン、教材コンテンツの作成などに困難を感じ、実践できない場合が多い。

\* 圓光大学校 師範大学 日語教育科、助教授、日本語学

特に大学教育におけるフリップラーニングの導入については、医学、看護学、工学などで取り入れられているが、導入年数が短いことから、外国語教育の面では英語や中国語での活用は増えつつあるにもかかわらず、日本語教育での活用はそれほどではない現状である。

一方、日本でのフリップラーニングの研究は韓国とあまり差が見られないが、外国語教育における反転授業の可能性として、学生一人一人の完全習得学習や協同学習などアクティブラーニングの時間の捻出につながることで、従来の授業では行い得なかった学習活動の時間が捻出できることなどを指摘しており（船守，2014）、近年日本語教育における実践も少しずつ報告されている。

本稿では、まず、外国語学習としての日本語教育的な面からの研究が積極的に行われている中で、日本での日本語教育にフリップラーニングがどのように取り入れられているか、その特徴を把握する。次に、韓日の大学教育におけるフリップラーニングの批判的な面や、実際の教育現場でそれを妨げている原因を分析する。

最後に、日本語教育現場でのフリップラーニングの活用を目指し、それを実践活用した韓日の日本語教育における事例研究の検討を行い、ひいてはフリップラーニングの日本語教育への活用とその課題について考察していきたい。

## 2. 研究対象と方法

### 2.1. 研究対象

文献検索は、日本の国立情報学研究所の学術情報データベースのCiNii（サイニイ）を用い、「Flipped learning」、「反転授業」、「大学」というキーワードで2017年10月30日に検索を行い、215件が抽出された。韓国の場合は、韓国教育学術情報院の学術研究情報サービスのRISSで「Flipped learning」、「대학」というキーワードで2017年10月30日に検索し、178件が抽出された。さらに、今回の研究対象は大学教育の中でも「日本語教育」におけるフリップラーニングの実践に関する文献の比較検討を行うため、「日本語」をかけ合わせ、韓国の場合は5件、日本の場合は4件が抽出された。

<表 1> 韓国と日本におけるフリップトレーニングを日本語教育に活用した文献

	著者 (年代)	題目
韓国	薛根洙 (2016)	「차세대 일본어교육의 방법론 연구 - 「KHUB System」을 이용하여-」
	趙大夏(2016)	「플립러닝(Flipped Learnig)을 활용한 일본어교육 사례 연구」
	權寧成(2017)	「플립러닝의 도입과 일본어교육」
	廉美蘭(2017)	「플립드러닝을 활용한 교양일본어의 신수업 제안 -SNS를 활용한 수업 스타일-」
	齊藤明美(2017)	「Flipped Learningを活用した協働学習」
日本	中溝朋子(2016)	「日本語中上級文法クラスにおける反転授業の試み」
	古川智樹, 手塚まゆ子 (2016)	「日本語教育における反転授業実践:上級学習者対象の文法教育において」
	尹智鉉, 岩崎浩与司, 鄭良媛 (2016)	「反転授業型オンライン日本語コースにおける初級日本語学習者向けの遠隔チュートリアル」
	中溝朋子(2017)	「留学生対象日本語クラスにおける反転授業の実践:中上級文法クラスにおける試み」

## 2.2. 研究方法

まず、韓日の大学教育におけるフリップトレーニングの文献の比較を行い、韓日の日本語教育におけるフリップトレーニングの実践と課題に関する文献を、著者(年代)、対象、フリップトレーニングの回数、目的、事前課題（授業の前）、対面授業（授業中）という項目に分けて比較検討を行う。

## 3.韓日の大学教育におけるフリップトレーニングの先行研究の検討

### 3.1. 韓日の大学教育におけるフリップトレーニング

Fliped Classroom（反転授業）が広まるきっかけとなったのは、米国の高校の科学の教師であるBergmannとSamsが、欠席した生徒の補講のため講義内容を収録し、オンラ

インに掲載したことにある。この講義内容の公開に世界の生徒や教員から反響があり、他の学校の授業でも使われ始めた。そのあと、BergmannとSamsは生徒の補講のためだけでなく、自身の講義を録画して授業前に視聴し、授業中に理解度チェックや個別指導・プロジェクト学習を行う形態を「反転授業（“Flipped” Classroom）」と呼び、彼らの実践がマスメディアで取り上げられたことがきっかけでこの用語が一般に知られるようになった（Bergmann & Sams, 2012：東京大学大学院情報学環・反転学習社会連携講座 <http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/index.html>）。

韓国でのフリップラーニングは、「Flipped classroom」、「Flip teaching」、「Flipped instruction」、「Flipped learning」のように多様な用語で用いられており、「플립러닝」「플립드러닝」「거꾸로 교실」「거꾸로 수업」「거꾸로 학습」「역진행수업」などと訳され、研究分野あるいは学者によって定義が少しずつ違っている。

日本でのFliped Classroomの概念が広まるきっかけとなったのは、2011年冬にインターネットで配信されたSalman KhanによるTEDでの「ビデオによる教育の再発明」のスピーチによるものである。Fliped Classroomについて、2011年東京大学の内山が「反転授業」と意識し（内山ら, 2014）、近年、反転授業という表現が浸透してきている（中川, 平良, 2016）。ところが日本では、「Flipped classroom」を一般的に「反転授業」と訳し、「反転学習」とも訳され、混用して使われている。「反転学習とは、授業と宿題の役割を「反転」させ、授業時間外にデジタル教材などにより知識習得を済ませ、教室では知識確認や問題解決学習を行う授業形態のこと」<sup>1)</sup>を指しており、反転授業とはほぼ同義で用いられているので、本稿では、まだ以下「反転授業」と「反転学習」をフリップラーニング（「Flipped learning」）と称する。

韓国の大学教育におけるフリップラーニングの研究をみると、傾向として、フリップラーニングの紹介、授業デザインの開発、授業デザインの開発と教科目の運営の事例研究、フリップラーニング学習者の授業資料に対する理解度や学習目的の達成の度合いや満足度の研究というものが多く、事例研究としては、数学、人文、社会の多方面からフリップラーニング授業のデザインと適用の効果を分析したものが見られる。たとえばKAISTで、2012年から授業を運営し、2014年を基準にし102科目においてフリップラーニングを活用した授業を行っている。

日本でも、オンラインと対面講義を組み合わせたブレンディット・ラーニングの一つとして

1) 東京大学大学院情報学環・反転学習社会連携講座 <http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/index.html>

注目され、小・中学校を中心に注目を集めているが、大学でも数学や英語など様々な教育分野の実践報告が増えている。

韓国と日本の大学教育におけるフリップラーニングに関する文献をみると、韓国の場合は、すでに述べたように、フリップラーニングの定義や紹介、教育的な意味、大学などにおける導入事例ならびにフリップラーニング学習者の授業資料に対する理解度、及び学習目的の達成度、満足度を分析した論文が多く見られた。

日本の場合は、理系の数学、物理、科学やコンピューター関連の授業における事例研究が多く見られる（中川・平良、2016など）が、これは理工系の授業は専門知識の習得のため、知識伝達型の講義が行われることが多く、授業に活用しやすいためである。また、歴史、語学（英語）のように、情報の伝達量が多い科目にも導入されている。このように、日本の研究の特徴としては、韓国と比べ、フリップラーニングの紹介やその教育学的意味を検討することより、むしろフリップラーニングが実際の授業でどのように活用されているかを綿密な事例研究によって明らかにすべく努めている点が窺える。

### 3.2. フリップラーニングの問題点

フリップラーニングの効果として、一般的に、①インプット型からアウトプットへの学びの転換、②学生同士の相乗的な学習の動機付けの誘発、③学生の学修行動の見える化の推進、④クラス内での協同意識やクラスへの帰属意識の向上と、教員への親近感の向上、⑤時間外学習時間の増加、⑥全体的な学力の確実な向上と学生間の学歴差の解消、⑦時間の有効活用、という七つの点が挙げられる（小川、2015）。また、池西（2015）は、「学生の活用性の高い参加型の教授で主体的な学習活動を育成することができるとともに、グループワーク、あるいは応用課題に取り組むことにより知識の活用能力、思考力、コミュニケーション能力、問題可決能力育成が期待できる。また、学生個々の学習状況や到達度の把握がしやすく個別指導に役立てることが可能である」（中川・平良、2016：11 再引用）と述べている。

このように、フリップラーニングの効果は認められているが、フリップラーニングへの誤解により、実際の授業での活用を妨げている原因がみられる。続いて、そのフリップラーニングの誤解による問題点を考察してみる。

신종호, 박수영(2017)では、大学授業でフリップラーニングを取り入れる際に障害になる要因を分析したが、一番の障害要因として、フリップラーニングの授業デザインやオンライン教材の製作などのための時間と労力に対する負担、フリップラーニングを授業に

活かすための授業全体を設計する能力や経験およびノウハウの不足、学習者の事前学習の負担などの順に表れた。

韓日の大学授業でフリップラーニングを取り入れる際の問題点を整理してみると、次のようになる。

- 1) 事前学習の遂行と関連するところの主体的な学習に対する負担、パソコンの使用時間の増加を問題点として指摘している。(김백희, 김병홍, 2014; Nielsen, 2012; Strayer, 2012)
- 2) 教師の場合、追加の授業資料に対する責任感が求められ、オンライン教材、動画資料の製作などの労力に負担を感じ(Bergmann & Sams, 2012)、教員演習、学習環境の調整のためのコンテンツ及びパソコン機器の購入などによる経済的な負担も感じていることが確認された(Sparks, 2011)。
- 3) 学習者が事前学習をせず授業に参加する場合、グループ活動及び授業が行われにくく(Kang, 2015)、事前学習で提供されるオンライン授業も、その正確な形態もしくは構造が如何なるものであるか、という概念が曖昧であることも指摘されている(문지윤, 이정민, 조보람, 박현경, 2016 ; 131 再引用)。

以上、フリップラーニングの問題点を1) 教授する側のコンテンツ開発ならびに対面授業での教室活動に対する負担、2) 学習者が感じるフリップラーニングの教室活動や参加への負担、3) フリップラーニングを活かす授業が可能となるべく大学の制度を改善するという、大きく三つの点に整理できる。

日本でも韓国と同様に、教授する側のオンライン教材コンテンツ開発の負担が無視できないという指摘はあるが、様々な事前課題を踏まえた事例研究を通じ、対面授業の教室活動における学習者側の課題点を指摘する傾向がある(船守(2014))。ビデオ教材は必須ではなく、なるべくビデオ教材にコストがかからないいわゆる貧乏人の反転授業<sup>2)</sup> (poor man's flipped classroom) を行おうとしている。

近年、フリップラーニングにおける事前学習のためのコンテンツ施策、ならびに教材の準備という面では、イメージや動画を簡単に自作できる機械やプログラムの開発が進んでいる。たとえば、静岡大学情報基盤センターでは、反転授業やプレゼンテーションのため

2) 山里敬也(2016 : 23)では、反転授業における授業時間外学習は、一般にはビデオ教材を用いて行うものとしているが、それにはコストがかかる。そこで、なるべくコストのかからない反転授業(貧乏人の反転授業と呼ぶ)を試行している。

の動画の作成で、ソフトバンクロボティクス社の提供する人型ロボット、Pepper(ペッパー)が講師を代りし動画を制作する無償サービス「情報サービス for Pepper」の運用を開始しており、教員はパワーポイントの資料とテキスト化した台詞を作って同センターに申請すれば、そこでペッパーが講師を務める反転授業用の動画を作成できるようになっている。一例であるが、オンライン教材の製作に対する負担は徐々に減少していくものと思われる。

## 4. 韓日の日本語教育におけるフリップラーニングの比較

### 4.1. 韓国の大学での日本語教育の場合

近年、韓国での日本語教育におけるフリップラーニングを授業に活用した事例研究がいくつか見られる。

<表2> 韓国の大学での日本語教育におけるフリップラーニングの事例研究

著者 (年代)	対象	人数	回数	科目	方法	事前課題	対面授業
薛根洙 (2016)	2015 年度2 学期			日本語 学の理 解	K H U B System、 MOOC、 Flipped Learning、 SNS	動画、学術資 料、オンライン 講座、Web文 章、スライド (PPT)	
趙大夏 (2016)	1年生		一学期 (2週～ 14週)	日本人 と漢字	Flipped Learningと PBL	動画視聴	PBL
権寧成 (2017)	2年生 1学期			日本語 講読	Flipped Learning	動画視聴 後、テキストの 本文の一部分 の日本語の作 文の課題	テキストの本 文の一部分に 関する日本語 の作文の課題 を出し、学習 者はグループ ワークで質問 や説明をなが ら、問題解決

	2年生 2学期			日本漢 字	Flipped Learning	動画視聴	グループワー クで学生同士 が協同して課 題解決
	3年生 1学期		最初の一週に 一時間/徐々に 回数を増やす	新聞放送日本 語	Flipped Learning	日本の教養の 放送視聴、 文型、文法の 説明	内容の把握、 解釈、聞き取 りに関する問 題をグループ ワークで解決
廉美蘭 (2017)	教養 科目の受 講生	62(基礎42, 初級20)	20日 (3.20-4. 10)	教養日 本語	Flipped Learning	動画視聴、 SNS上で フィードバック を行う	事前学習した 動画をもう一度 学習
齊藤 明美 (2017)	日本 学科の 3、4 年生	47	中間テ スト後の 9週～ 12週の 4週間	日本語 学の理 解	Flipped Learningと 協同学習	動画視聴 学 習ノートの作 成、クイズ、課 題	事前学習の確 認とフィード バックを行 い、学生の事 前学習、クイ ズ、課題をも とにグループ で討論し、発 表の準備を進 める。

薛根洙(2016)では、日本語教育の方法の一環として、「ケイハブシステム (KHUB System)」というツール (Tool) を利用し、「ムークMOOC (Massive Open Online Course)」というオンライン公開授業でフリップラーニングが可能となるよう設計し、それを2015年度の2学期の講義科目と融合させた。動画、学術資料、オンライン講座、Web文章、スライド (PPT) など多様な資料を学習者が選択できるという特徴が見られるが、回数や、対面授業による問題解決の方法、授業後の評価や指導については述べられていない。事例研究というより日本語教育の方法論を研究することに目的が置かれているものと考えられる。

趙大夏(2016)では、『日本人と漢字』という科目にフリップラーニングとPBL (Problem Based Learning) タイプを融合して運営した事例研究である。日本語の漢字は学習の方法と学習量という面で非常に負担となる。そのため、オン・オフラインの講義を配分し、事前課題ではオンライン講義の動画を提示し、対面講義では、事前課題に対する学習者の質問にフィードバックし、PBL (Problem Based Learning) タイプを導入して、学習者が日本語の学習過程の中で経験した問題点を導き出すように介入し、教導



していく授業が行われた。

権寧成(2017)では、フリップラーニングの授業モデルに対する環境および方法、日本語教育においてフリップラーニングが多様な科目に活用できる活用方を提示した。事前課題では動画を製作し、学習者が事前に動画を視聴することを原則とし、対面講義では、事前課題の動画に対する講義は省略したが、問題への解答など学習者からの質問にフィードバックするというものである。

事例としては『日本語講読』『日本語漢字』『新聞放送日本語』という3科目を紹介している。まず、『日本語講読』は2年生の1学期の科目で、事前課題は、動画を提示し、対面講義では、テキストの本文の一部分に関する日本語の作文の課題を出し、学習者はグループワークで質問や説明をしながら、問題解決を行った。『日本語の漢字』は2年生の2学期の科目で、日本の教育漢字(1,006字)を1学科に全部習得することは出来ないため、授業前では、動画で漢字の形成原理を提示し、対面講義では、動画で学習した内容と関連した漢字に関する課題をグループワークで学生同士が相互に解き合い、問題解決を行った。『新聞放送日本語』は、3年生の1学期の科目で、授業前では、日本の教養放送の動画を提示し、文型と文法の説明を行った。対面講義では、放送の内容に関する問題を解くため、解釈、内容の把握、聞取りに関する問題をグループワークで解いていった。問題解決の方法として、グループワークは、授業のテーマに学生の関心を向け、さらには自己学習を促すことを目的に行われた。権寧成(2017)では、講読、漢字、視聴学の授業にフリップラーニングを多角的な方面で活用したが、授業後の評価と指導についての言及がない。

廉美蘭(2017)では、今まで日本語を専攻にしている学生を対象にして行われた事例研究とは違って、日本語の非専攻者である学生を対象に、大人数であるが故の不足しがちな授業時間というハンデを抱えつつも、大学の教養日本語の科目にフリップラーニングを取り入れた事例研究がなされている。SNS‘BAND’を利用して、『基礎日本語』と『初級日本語』に必要な基礎文法、挨拶に関する動画などを提示した。ただ、20日間という短期間に行われた模擬授業であること、授業のテキストと連携していないこと、事前課題への受講性の参加が強制ではなく授業後の効果について検討できていないことは指摘できるが、教養日本語の科目にフリップラーニングを試みたことは高く評価できる。

齊藤明美(2016)では、大学3、4年生を対象とする「日本語学の理解」という科目に協働学習を導入し、さらにフリップラーニングを活用した事例研究の報告がある。事前学習、授業内学習、授業後の活動に分け、事前課題で学習者はオンライン学習コンテ

ツを視聴し、学習ノートの作成、クイズ、課題解決を行う。対面授業では、事前学習の確認とフィードバックを行い、学生の事前学習、クイズ、課題をもとにグループで討論し、発表の準備を進める。教授者は発表の準備を進めるように指導し、評価とフィードバックを行う。授業後の活動では、学習維持とその共有、及びポートフォリオの作成指導ならびに管理を行う。フリップラーニングの段階、教授者と学習者の活動を区別しており、時間や活動方針に至るまで詳しく設計している。

以上、韓国での日本語教育におけるフリップラーニングの事例研究を分析した結果、フリップラーニングの展開方法については、事前課題として学習コンテンツ（動画）の視聴をし、その後の対面授業では、グループワークが中心であり、グループの演習課題に取り組み、事前課題の確認とフィードバック、個別指導、PBL (Problem Based Learning) やアクティブ・ラーニングが組み合わせて行われた。フリップラーニングを講義全体に活かしたわけではなく、講義の一部のみを導入する展開方法が一般的であった。

多様な日本語の授業に取り入れているものの、受講生の人数や回数が明示されていないこと、事前課題として活用されている動画が授業のために直接作られた授業資料なのかネット上の動画なのかを区別しにくいこと、教授者と学習者の活動が区別されず、教授する側からのみ述べられている傾向があること、授業前、授業中、授業後と区別して、事前課題と対面授業での活動ならびに授業後の評価、指導までの詳しい記述がなされていないことなどが問題点として挙げられる。

では、続いて、日本での日本語教育におけるフリップラーニングは韓国に比べてどのように行われているかを見てみる。

## 4.2. 日本の大学での日本語教育の場合

日本での日本語教育におけるフリップラーニングを授業に活用した事例研究をみってみる。

倉本・児崎 (2015) では、初級ビジネスパーソンを対象とし、ビジネス場面を取り上げた場面シラバスになっており、場面場面で必要とする基本文型の動画を Explain Everything が使用・作成し、授業を行った。

尹智鉉、岩崎浩与司、鄭良媛 (2016) では、対面式で授業を行うことが時間的に難しい大学院生を対象に初級日本語の科目でオンデマンド講義を行った。学習者は、事前に語彙・文法を自主的に教科書で学習し、ドリル練習の動画を視聴した上で、オンデマンド講義を受講した。文法項目を反転させる取組が一般的であるのに、ドリル練習も反転させているのは、回数が限られているオンデマンド講義をより実践的なものとするその特徴を

示すものである。

藤本 (2016) では、上級日本語学習者のアカデミック・ライティングの基礎知識に関する動画をExplain Everythingを使って作成し、授業を行った。

中溝 (2016) では、留学生20名を対象とした中上級レベルの日本語文法授業での実践について言及した。完全習得学習型を目指し、授業で取り上げる表現4～6項目の解説ビデオ (PowerPointで作成。mp4形式で1本5～12分程度) を、Moodleを用い、授業前に文法項目の解説ビデオを配信、そして対面授業では小グループによる演習問題を行い、最後に理解度確認問題とコメント記入を行った。

手塚、古川 (2014) は、留学生への日本語教育、中でも特に文法教育に焦点を当て、日本語上級クラス19名を対象に、3ヶ月間の予習動画視聴率、及びe-learning実施率のログ分析、アンケート、インタビュー調査を行うことにより、日本語教育におけるフリップラーニングの効果検証を行った。この研究は事例研究というより、フリップラーニングの効果の検証を目的としている。

フリップラーニングの展開方法については、完全習得学習型を目指し、事前課題で講義動画の視聴やパワーポイントに音声をいれた映像を視聴し、事前学習・課題後における対面授業の教室活動ではグループワークが中心になり、グループの演習課題への取り組みや、アクティブ・ラーニングが組み合わせて行われた。講義の全過程でフリップラーニングを活用したのか、それに関する記述がなかったため、講義の一部でフリップラーニングを導入した展開方法が多く見られた。

## 5. まとめ

本稿では、韓国と日本の論文データベースに基づいて、韓日大学教育におけるフリップラーニングの研究の現状と問題点を比較検討した。また、フリップラーニングを活用した日本語教育における事例研究の検討を行い、フリップラーニングを実際の日本語教育現場で効果的に実践、及び拡散させる上で必要な要素について考察を行った。

韓日の大学におけるフリップラーニングの研究をみると、韓国の場合はフリップラーニングの定義に対する研究や、教授する側、たとえば教員のコンテンツ開発に対する負担、教室活動に対する負担に焦点が当てられている傾向がある。それに対し日本の場合は、学習

者側の時間外の学習時間の増加に伴う負担に言及し、対面授業で学生が主体的に活動が出来るようになるための具体的な事例研究がなされていると言える。近年、韓国では日本語教育におけるフリップラーニングの活用が進んでおり、それに関する多くの事例が見られ、必要に応じて随時取り入れている。しかし、フリップラーニングは単に授業と事前学習を反転させることを指すのではなく、教授から学習へのパラダイムの転換、即ち学びの主体であるところの学習者に焦点を当て、人数や回数、方法、授業前・授業中・授業後、教授と学習者の活動の区別、評価などを含め、これらをより細かく考慮に入れた授業デザインの構築が必要なのである。そのためにはフリップラーニングを活用した事例研究を通して、研究者同士がネットワークを構成し、研究を進めていくべきであるとする。

## 【参考文献】

### ・韓国

- 권영성(2017) 「플립러닝의 도입과 일본어교육」 일본어문학 Vol.77, 한국일본어문학회, pp.1-20.
- 김은진(2016) 「외국어 수업을 위한 플립드 러닝(Flipped Learning)수업 모형 개발 연구」 교양학연구 3집 다빈치미래교양연구소 pp.131-154.
- 문지윤, 이정민, 조보람, 박현경(2016) 「플립드러닝을 적용한 영어 수업이 학업성취도와 영어 효능감에 미치는 효과」 『교육종합연구』 제14권 제2호 pp.127-152.
- 설근수 (2016) 「차세대 일본어교육의 방법론 연구 - 「KHUB System」을 이용하여-」 日語日文学研究, Vol.97 No.1, pp. 273-291.
- 신중호, 박수영(2017) 「대학 수업에서의 플립드 러닝 실천 확산을 위한 교수 인식 연구 : A 대학을 중심으로」 학습자중심교과교육연구 제17권 제15호, pp. 347-371.
- 이민경외17공저(2016) 『플립러닝의 이해와 실제』 교육과학사, pp.1-357.
- 이민경(2016) 「대학교육 패러다임의 변화와 플립러닝」 『플립러닝의 이해와 실제』 이민경 외17공저 교육과학사, pp.13-38.
- 이용재(2016) 「플립러닝(Flipped Learning)에 의한 브랜드 교수학습 모형 사례연구」 브랜드 디자인학연구, Vol.14 No.3. pp.151-160
- 염미란(2017) 「플립드러닝을 활용한 교양일본어의 신수업 제안-SNS를 활용한 수업 스타일-」 일본문화학보제73집, 한국일본문화학회 pp.111-124.
- 임정훈(2016) 「대학교육에서의 플립러닝(Flipped Learning)의 효과적 활용을 위한 교수학습 전략 탐색: 사례연구」 교육공학연구, Vol.32 No.1 pp.165-199.
- Bergmann,J.&Sams,A(2012).Flipped learning: Gateway to student engagement. Washington, DC: International Society for Technology in Education.
- 정찬필, 임성희(역)(2015). 『거꾸로교실 : 진짜 배움으로 가는 길』 서울: 에듀니티
- 趙大夏(2016) 「플립러닝(Flipped Learnig)을 활용한 일본어교육 사례 연구」 일본어문학, Vol.72 pp.187-206.

・日本

- 池西静江 (2015) 「看護教員のための授業力UPのポイント」メディカ出版、pp.25-35.
- ジョナサン・バーグマン (著)、アーロン・サムズ (著)、山内祐平 (監修)、大浦弘樹 (監修)、上原裕美子 (翻訳) (2014) 『反転授業』オデッセイコミュニケーションズ.
- 小川勤 (2015) 「反転授業の有効性と課題に関する研究—大学における反転授業の可能性と課題—」『大学教育』12, 山口大学大学教育機構, pp. 1-9.
- 倉本文子, 児崎静佳 (2015) 「文法運用力向上のための反転授業のデザイン」『2015年日本語学校振興協会研究大会予稿集』
- 斉藤明美 (2017) 「Flipped Learningを活用した協働学習」第35回国際学術発表大会、韓国日本語学会予稿集, pp.81-87.
- 高橋薫・藤本かおる・保坂敏子・倉本文子 (2016) 「日本語教育における反転授業の可能性」日本語教育国際研究大会ポスト発表
- 馬場崎賢太、増田由佳、Kenta Babasaki・Yuka Masuda (2016) 「大学英語における反転授業の導入と学習効果(森島吉美教授退職記念号)」広島修大論集 57(1), pp.109-113.
- 武田俊之 (2016) 「反転授業に関する実践および研究の展望」関西学院大学高等教育研究 (6), pp.95-100.
- 手塚まゆ子・古川智樹 (2014) 「留学生教育におけるブレンディッドラーニングの実践—文法教育の反転授業の試みと課題—」教育改革ICT戦略大会発表.  
([www.juce.jp/archives/taikai\\_2014/c-15.pdf](http://www.juce.jp/archives/taikai_2014/c-15.pdf))
- 中川潔美・平良美栄子(2016) 「大学における反転授業の実践に関する文献検討」朝日大学保健医療学部看護学科紀要, pp.7-13.
- 中野彰 (2014) 「反転授業の動向と課題」武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 (23), pp.35-38.
- 中溝朋子 (2016) 「日本語中上級文法クラスにおける反転授業の試み」日本語教育方法研究会誌 22(3), pp.78-79.
- 藤本かおる (2016) 「学習者から見た反転授業実践—アカデミック・ライティングでの実践から—」『2016ICJLF 予稿集』日本語教育国際研究大会口頭発表.
- 船守美穂(2014) 「反転授業へのアンチテーゼ (特集 反転授業がすべてを解決するのか)」主体的学び (2), pp.3-23.
- \_\_\_\_\_ (2014) 「反転授業の可能性と課題—外国語教育において反転授業は有効か?—」外国語教育メディア学会関東支部第133回研究大会 発表要項 pp.46-51.
- 古川智樹, 手塚まゆ子 (2016) 「日本語教育における反転授業実践 : 上級学習者対象の文法教育において」日本語教育 (164), 126-141.
- 山里敬也(2016) 「貧乏人の反転授業」(特集アクティブラーニングの可能性を問う)名古屋高等教育研究(16), pp.23-38.
- 尹智鉉、岩崎浩与司、鄭良媛 (2016) 「反転授業型オンライン日本語コースにおける初級日本語学習者向けの遠隔チュートリアル」早稲田日本語教育実践研究 4, pp.61-62.

国立情報学研究所(NII)学術情報ナビゲータ: <https://ci.nii.ac.jp/>(검색일 2017.10.30)

학술연구정보서비스 : <http://www.riss.kr/index.do>(검색일 2017.10.30)

東京大学大学院情報学環・反転学習社会連携講座 : <http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/index.html>  
(검색일 2017.10.30)

[http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity\\_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/07/kaoru-fujimoto\\_gakusyusyakaramitahantenjugyojissenn.pdf?TB\\_iframe=true](http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/07/kaoru-fujimoto_gakusyusyakaramitahantenjugyojissenn.pdf?TB_iframe=true) (검색일 2017.10.30)

논문 투고 일자 : 2018. 01. 10.
논문 심사 일자 : 2018. 01. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 02. 05.

<要旨>

韓日の大学の日本語教育におけるフリップラーニングについての一考察

金英児

本稿では、最近、国内外の教育現場で脚光を浴びつつある授業展開方法であるフリップラーニング (Flipped learning) に関する文献の比較検討を行った。事前にオンライン学習および動画資料で予習した学習者が教室で演習やディスカッションなどに取り組むための教育実践活動でブランド型授業やアクティブラーニング型授業の一つとして、大学教育においてもその重要性が高まるものの、実際授業のデザイン、教材コンテンツの作成などに困難を感じ、実践できない場合が多い。従って、韓日大学教育におけるフリップラーニングの研究の現状と問題点を比較検討してその長所と問題点を分析し、フリップラーニングを活用した日本語教育における事例研究の検討を行い、フリップラーニングにおける日本語教育現場での効果的な実践及び拡散に必要な要素を考察した。

A Study on Flipped Learning in Japanese Education at Korean and Japanese Universities

Kim, Young-Ah

This paper is review on the biblical comparison between Korea and Japan on the flipped learning which is the class managing method spot lighted at domestic and foreign education fields recently.

Flipped learning is a model developed from online study and blended learning that connects theonline and offline aspects before the start of the class.

Although its importance has been emphasized in university education, it has not been implemented in many cases due to the difficulties inimplementation such as the actual class design, textbook contents development, and operation. Therefore, the status and issues faced in the studies on flipped learning were explored in Korean and Japanese university education. Its advantages and problems were analyzed by comparing and reviewing case studies on the use of flipped learning in Japanese language education.

The essential factors were studied for the flipped learning class to perform and extend to actual education of Japanese language effectively.